

中学生の対人関係のあり方と「心の教室」の意義との関連 — 中学生が求めている第三者的立場の相談員について —

高木秀明* ・ 堀江真澄**

The Relationship between Junior High School Students' Interpersonal Relations and Significance of *Classroom of Hearts* — How Much the Students in Junior High Schools Are Seeking for Counselors Who Advise Them on the Outsiders' Standpoints —

Hideaki TAKAGI & Masumi HORIE

This study refers to the junior high school students' interpersonal relations, their opinions and experiences of visits' to the *Classrooms of Hearts* of each school, and necessity of the counselors who advise them on the outsiders' standpoints. It is based on the survey to the 1,341 students by the questionnaire method. Another research has been conducted on counselors of *Classrooms of Hearts* as to the products and problems of the *Classrooms*, their cooperations with junior high schools and their opinions to improve the *Classrooms*. Participant observations, moreover, have been carried out over the students' visits to the *Classrooms*.

It was concluded that the existence of *Classrooms of Hearts* in schools and counselors of *Classrooms* who advise students on the outsiders' standpoints are urgently required for students who have problems in making good interpersonal relations or who feel a sense of strong loneliness and severe alienation in the school.

問題及び目的

21世紀を迎えた。しかし相変わらず社会では青少年の凶悪犯罪が後を絶たない。17歳の青少年を中心とした犯行の背景には、家庭・学校・地域社会それぞれの要因が複雑に絡み合っている。この問題の解決を図るためには、家庭・学校・地域社会の一体となった取り組みが必要である。

中学校においては、生徒指導に対する理解もかなり深まり、そのための適切な指導体制の確立、指導方法の工夫がなされ、着実に充実の方向に向かっているように思われる。しかし、生徒達の周囲には、精神的に不健康な状態に引き込むような様々な要因が存在し、非行をはじめとする生徒の反社会的な行動や「いじめ」、「不登校」などが深刻な問題となっている。不登校児童生徒数は年々増加し、ここ数年過去最高を記録している。

*学校教育講座

**厚木市立依知中学校

文部科学省の学校基本調査によると1999年度に年間30日以上欠席した不登校の小中学生の数は130,208人で、調査を開始した1991年度の2倍に当たる深刻な事態となった。

「いじめ」や「不登校」の問題の要因や背景には、学校生活や家庭環境、友人関係などの複合的要因が存在する。思春期の子供達は精神的にも肉体的にも不安定な時期を過ごす。過去の調査では精神的な悩みや不安を相談する相手として、もっとも多かったのは友人である。逆に親や教師はきわめて少なく、子供との信頼関係も低いものであった。しかし、今日では友人関係が希薄で、本音で悩みをうち明ける友人がいない生徒が増加している。世間話をする友人すらいない生徒もいることが、分かっている。その結果、休み時間などに話す友人がなく、孤立して教室に居づらくなり、学校生活がつまらなくなつて学校を休みがちになる傾向がでてくる。

落合(1998)によると、中学生における「悩み」の中の対人関係の因子で最も高かったのは、「友人との人間関係」である。以下は、「自分がいじめられていると感じるとき」、「部活の人間関係に困ったとき」、「友人には理解されていないと感じたとき」、「友人がいじめられているとき」と続く。これらの悩みを解決するには、友人に相談したり、親や兄弟家族に相談したり、自力で乗り切ったりするケースが多いが、誰にも相談できず学校生活が不安定になっている生徒も少なくない。落合・佐藤(1996)によると、「自己を開示し、積極的に相互理解しようとするつきあい方」は、中学生が最も低かった。これは中学生の年齢では、まだ友人と本音でつきあうことがむずかしいことを示している。そして、青年期において疎外感が最も高いのは、中学生の時期で(宮下・小林, 1981)、その後は徐々に緩和されることも分かっている。

文部科学省では、いじめや不登校等の問題の解消を目指して、①一人一人を大切に、個性を生かす教育の充実、②教員の資質・能力の向上、③教育相談体制の整備、④家庭・学校・地域社会の一体となった取り組みという観点から、各種の施策を総合的に推進している。具体的には、①学校における「スクールカウンセラー」の活用についての調査研究及び配置補助、②「心の教室相談員」の配置、③不登校児童生徒の適応指導総合調査研究委託、④教育相談員や学生ボランティアによる巡回訪問等による「ハートケア教育相談活動モデル推進事業」、⑤地域社会が一体となって、いじめ対策に取り組む「いじめ対策地域連携モデル市町村」の指定、⑥国立教育会館の「いじめ問題対策情報センター」の情報提供及び電話相談の充実などを行っている。

平成7年度にスタートしたスクールカウンセラー派遣事業は年々その数を増し、平成7年度には全国で154校、平成8年度は553校、平成9年度は1,065校、平成10年度は1,661校、平成11年度は2,015校、平成12年度は2,250校に派遣された。また、平成13年度からは5カ年計画で、スクールカウンセラーを全国の3学級以上の公立中学校に配置する事業が始められている。その理由は、絶えることなく続いている青少年における深刻な問題と、文部科学省が平成9・10年度の2年度にわたって行った、スクールカウンセラー派遣事業における調査研究の成果にある。スクールカウンセラーは、「評価者」として日常接する教員よりも、児童・生徒や保護者が気兼ねなく相談できる第三者的存在である。また、カウンセリング時におけるスクールカウンセラーの児童心理についての高度な専門性に裏打ちされた受容の態度によって児童生徒の中で自己を理解してくれているという安心感が芽生え、その結果自己を真摯に振り返り、自己解決しようと努力するようになる。

スクールカウンセラーとは別に、教員以外の第三者的立場として、平成10年度より、「心の教室相談員」も配置された。スクールカウンセラーと同様に「心の教室相談員」も成果を上げたため、年々増員されている。平成10年度は7,500校、平成11年度は7,800校に「心の教室相談員」が配置さ

れた。

「心の教室相談員」については、平成10年度に、経済政策の一環として各省庁に配分された予算をもとに、中学校を対象に文部科学省が実施したものだ。当時はあくまでも単年度予算で、継続されるか否かも不明だった（鶴養，2000）。スタート当初は、相談員自身もとまどい「何をすべきか」、「何ができるのか」手探り状態だった。また、相談員の意識と教師・生徒・保護者の期待にはズレがあり（落合，1998）、イメージしている活動が異なった。しかし、それなりの成果が報告されたため、平成11・12年度も「心の教室相談員」はさらに増員され、各中学校に配置された。「心の教室相談員」の位置づけは、「生徒が悩み事などを気軽に話せストレスを和らげることができる第三者的存在」であり、相談員として配置される人は、「教職経験者や青少年団体指導者など熱意ある地域人材」を活用することになっている。神奈川県の場合、「心の教室相談員」の前職・現職の最も多いものは、元教員などの学校関係者で、全体の49.1%にあたる。次に多いのは、PTA会長や保護司、民生委員などの地域の人々で21.8%、専門職の相談員は12.5%、以下大学院生、大学生、主婦、家事手伝いと続く。また、相談員の年齢構成は、20代20.1%、30代11.2%、40代23.0%、50代18.3%、60代24.2%、70代3.2%である。

「心の教室相談員」は、スクールカウンセラーとは性質が異なり、カウンセリングやコンサルテーションなどといった専門性を必要とする活動はしない。「心の教室」は、「生徒の心の居場所」として存在し、多くの生徒に利用されている。

本研究の対象となったA中学校でも、平成10年11月より「心の教室相談員」が配置され、相談活動を行っている。当初は、受け入れる学校側と相談員の双方が困惑することもあったが、定期的に会合を開いたり事例研究を行ううちに徐々に慣れ、利用する生徒も年間の延べ人数で700人を超えるほどになった。これは全校生徒数の2倍近くに当たる。「心の教室」の存在は学校に居場所がない生徒や友人と話ができない生徒にとって大切な空間と位置づけられよう。

A中学校では、2人体制で週4日間相談員が活動している。1人は教職経験を持つベテランで、もう1人は教員を目指している大学生である。1日平均10名の生徒が来室し、「心の教室」で過ごしている。2人の相談員にインタビューしたところ、生徒の来談の主な理由は、次の通りだった。

- ・クラスに友人がいなくてどういうふうにも時間を過ごせばいいかわからないから
- ・友人との人間関係のトラブルで仲間外れになったから
- ・恋愛の悩み
- ・教師から叱責を受けた後、あるいは教師の指導に対する不満があったとき
- ・心の教室相談員とおしゃべりしたいから（集団）
- ・受験の不安や悩み
- ・定期試験の不安や悩み
- ・部活動に熱中できなくなったとき
- ・体調不良
- ・部活動の中の人間関係の悩み
- ・家庭の悩み
- ・相談員との談話をするため
- ・部活動をサボるため（親は、部活をやっていると思っているから）

「悩み」を相談に来る生徒以上に、教室に居場所がなかったり、休み時間をいっしょに過ごす友

人がいないという理由で来談するケースが多かった。

神奈川県では、平成12年度に、スクールカウンセラーが23校、「心の教室相談員」が、383校の中学校で活動している。平成10年度の神奈川県における「心の教室相談員」の配置の結果報告によると、

- ・生徒や保護者が、教師以外の人と相談ができ、これらの人の存在により、心の安定を得ることができた。
- ・養護教員の負担が減った。
- ・相談員の活動が地域に定着しはじめ、学校と地域との連携が深まった。

という成果があった。しかし、相談員との情報の共有化や秘密保持の兼ね合いなどで、相談員と教師との連携がうまくいかない場合がある。「心の教室相談員」は、スクールカウンセラーとは違い、カウンセリングにおける専門性を身に付けてはいないので、深刻な悩みをもった生徒などへの対応に戸惑う場面も予想される。そこで大切なのは、学校との連携である。

相談員とのインタビューの中で出てきた「心の教室相談員」の悩みは、

- ・不登校の生徒に対して無力である。
- ・子供の言動に対して指導したくなる時がある。
- ・いじめを受けている時の対応。
- ・専門的技量を必要とする相談活動。
- ・教師との連携、受け入れてくれる教師とそうでない教師の存在。
- ・担任と接する機会がないので、相談に来た生徒の担任は何を考えているか分からない。

など、相談活動における問題点があげられる。

中学生の発達段階は、一般に青年期前期にあたる。この時期になると、自我に目覚め、これまでの親や教師のような大人の希望や期待に従って生きてきた自分を見直し、自分で本当に納得できる生き方を求め、それを試そうとする時期に入る。しかし、現実とのギャップに苦しみ悩む時期でもある。また、身体的な悩みや友人関係の悩みなど、人には言えないものを多く抱え、精神面で大変不安定な状態になる。

本来、青年期は心理的離乳の途上であり、対人関係の中心は児童期までの親子関係から友人関係へと移行するとされる。以前は、青年期の友人関係は「心の友」と呼ばれ、人格的影響を及ぼしあうものとされてきた(井上, 1966)。しかし近年は、友人関係の希薄化が指摘されるようになった(松井, 1990)。また、落合・佐藤(1996)によると中学生の友人関係は、「自分と友人との間に距離をおき、まわりに合わせようとし、友達にも自分を見せようとはしない。自分の本音が問われるようなことは避け、自分を守ろうとする。そのためには、まわりに同調しようとする。そしてまわりの友達から特に好かれたいとは思わない。友達とのつきあいの中で自分が変わっていくことを期待せず、むしろ自分の地を出して仲間外れになることを恐れている。中学生では、一緒にいる仲間として、友人関係を位置づけていると考えられる。」とされる。このことから、中学生にとって一緒にいる仲間がいないことは、孤独感や疎外感を強く感じ、心の居場所を失うことにつながる。この意味において、「心の教室」の存在は極めて重要であると考えられる。

平成10年度から配置された心の教室相談員も、4年度目を終わろうとしており、各学校においていろいろな形で機能し、それぞれの目的を果たしている。

そこで、中学生の対人関係の調査や研究を行うことにより、対人関係のあり方と「心の教室」の

意義との関連について検討し、「心の教室」の必要性を明らかにしたい。また、「心の教室」における参加観察や、相談員へのアンケート調査を行うことにより、「心の教室」の配置による効果、及び学校との理想的な連携のあり方、今後の展望などを検討したい。

方 法

1. 研究・調査の内容

(1) 中学生における対人関係の調査・「心の教室」に対するアンケート調査

① 対人関係の尺度について

対人関係の尺度については、生徒の内面と外面に分け、それぞれ2つずつ合計4つの概念を下位尺度とした。「心の教室相談員」とのインタビューで教室に居場所がない生徒の実態や友人関係などについて調べるため、それらに関連するものとして、内面においては、疎外感と自己効力感の相反するものを下位尺度として設定した。外面については、友達とのつきあい方と学校適応度を下位尺度とした。各項目はいずれも「全くそう思わない」、「あまりそう思わない」、「どちらとも言えない」、「ややそう思う」、「非常にそう思う」の5件法で尋ね、それぞれの回答を1点～5点とした。

i) 疎外感

宮下・小林(1981)によると、疎外感とは「集団生活や社会生活の中で自分が他者から排除されている、あるいは、他者との間に距離感・異和感を感じ、どうしてもなじめない、とけ込めないという認知的感情」と定義され、青年期において発達的に減少することが明らかにされた。また、自我同一性(古沢(1968)の尺度による)と負の有意な相関があり、問題を持つ生徒は、問題を持たないものに比べ有意に高い疎外感を持つことが示されている。そこで、ここで使われた疎外感の尺度を参考にしながら、表現をさらに中学生に理解しやすいように変えた。

ii) 自己効力感

自己効力感とは、個人がある状況において必要な行動を効果的にできる可能性の認知を指す。ここでは、成田ら(1995)が作った自己効力感尺度を参考にし、項目の内容を変えずに表現を中学生に理解しやすいように直した。

iii) 友達とのつきあい方

青年期の友人関係は、親子関係、教師-生徒関係とは違い、青年同士対等な人間関係である。従って、どちらかが一方的に支えたり、配慮してくれる関係ではない。また、年齢が増すにつれ、遊び仲間から特定の友人に変化していく過程では、お互いにお互いぶつかり合い、傷つくこともある。よって青年期の友人関係においては、青年自身の成長につれて、自分で考えお互いに満足できるように友達とのつきあい方が変わっていくことが必要になる。落合・佐藤(1996)は、青年期の友人とのつきあい方を6つに分類し発達過程における特徴を研究した。それによると中学生の特徴は、6つの中で3つの因子に顕著に現れた。「自己開示し積極的に相互理解しようとするつきあい方」が低く、「みんなと同じようにするつきあい方」と「自己防衛的なつきあい方」が他の因子に比べ高かった。今回は、この6つに分けられた因子の中から似ている内容の項目の一方を削除し、表現を多少分かりやすく変えた形で使用

した。

iv) 学校適応度

教室の中での自分の行動や態度を客観的にみることによって、集団への適応について考える。授業中は気が付かなくても、業間の休み時間に一人でいたり、教室で話す友人がいなかったり、また、学校へ登校することへの抵抗を感じたり、学校生活の中で孤独感を感じる場面がなかったかなどを調べる項目を作成した。

② 「心の教室」に対するアンケート調査

質問項目は以下の通りとする。

i) 「心の教室」の配置やスクールカウンセラー派遣に対する生徒の意見

「必要である」、「必要でない」の2肢択一、理由を自由記述してもらう。

ii) 「心の教室」の利用経験の有無

iii) 今まで利用したことのない生徒の意見

生徒のその理由を7つの選択肢から、重複回答可で回答してもらう。

iv) 利用したことがある生徒の調査（目的）

利用した生徒についてその目的を14の選択肢の中から重複回答可で回答してもらう。

v) 利用したことがある生徒の調査（時間帯）

利用した生徒についてその時間帯を6つの選択肢の中から重複回答可で回答してもらう。

vi) 利用したことがある生徒の調査（感想）

利用した生徒について、その感想を9つの選択肢の中から重複回答可で回答してもらう。

(2) 「心の教室」を利用する生徒の参加観察

実際に「心の教室相談員」となり、その体験を通じて、利用する生徒の参加観察を行う。

i) 来談した生徒の目的

ii) 「心の教室」での様子

iii) 相談員との対話の内容

iv) 相談員同士の連携

v) 異なるタイプの相談員のところへ来談する生徒の違い

(3) 厚木市内公立中学校に配置されている「心の教室相談員」に対するアンケート調査

i) 利用した生徒数

ii) 生徒の利用目的

自由記述してもらう。

iii) 「心の教室」での様子

自由記述してもらう。

iv) 学校との連携のあり方

自由記述してもらう。

v) 「心の教室」の今後の展望

自由記述してもらう。

2. 研究・調査対象、研究・調査期間

(1) 中学生における対人関係の調査・「心の教室」に対するアンケート調査

i) 研究・調査対象

厚木市内公立中学校 4 校の1~3年1,341人 (男子691人, 女子650人)

ii) 研究・調査期間

アンケート用紙配布期間:平成12年 9 月21日~ 9 月22日

アンケート調査実施期間:平成12年 9 月25日~10月 7 日

アンケート用紙回収期間:平成12年10月10日~10月11日

(2) 「心の教室」を利用する生徒の参加観察

i) 研究・調査対象:A中学校(生徒数350人)の「心の教室」を利用した生徒82人

ii) 研究・調査期間:平成12年 9 月1日~10月31日

(3) 厚木市内公立中学校に配置されている「心の教室相談員」に対するアンケート調査

i) 研究・調査対象:厚木市内公立中学校13校の「心の教室相談員」19人

ii) 研究・調査期間:平成12年11月1日~11月18日

結果及び考察

1. 中学生における対人関係の調査・「心の教室」に対するアンケート調査

対人関係に関する100項目について、因子分析を行った。固有値が1.0以上の因子数21から順次因子数を減らし、バリマックス解を求めた。その結果、最適な解は8因子となった。得られた因子パターンはTABLE 1に示す。因子の解釈に用いる項目は、絶対値.38以上の負荷量を持つ項目とした。

また、8種類の対人関係の因子に対応する尺度について、性別(2)×学年段階(3)の2要因被検者間計画による分散分析により、性差と発達的变化の検討を行った。また、有意な交互作用が見られた場合には、単純主効果分析を行った。なお、以上の分析では、有意水準はすべて5%とした。その結果をTABLE 2に尺度名も併せて示す。また、その発達的变化をFIGURE 1に示す。

さらに、「心の教室」を利用した生徒の特徴を捉えるため、利用者と非利用者を比較するt検定を行った。その結果はTABLE 3に示す。

上記の8種類の対人関係について、第1因子から順に解釈された因子名と、それぞれについて行った分散分析の結果から見られる性差と発達的变化、「心の教室」を利用した生徒の特徴などについて述べる。

まず、F 1 (第1因子の意。以下順に同じ)の代表項目として、負荷量の高い項目を3つあげると「私は何でもすぐにあきらめてしまう方だ (.65)」、「めんどろなことやむずかしろなことは、手を出そうと思わない (.62)」、「むずかしろなことは、新たに学ぼうとは思わない (.60)」、また「新しいことをはじめようと決めても、出だしでつまずくとすぐにあきらめてしまう (.60)」で負荷量が同じだった。常に困難を避け、何事もネガティブに考えてしまう、また、消極的な態度が窺えるので、第1因子を「無気力・あきらめ」の因子と命名した。この第1因子に対応する第1尺度得点は、TABLE 2より3年生が1、2年生より高く、男女間においては女子より男子の方が高かった。これは3年生になると勉強の内容が難しくなり、勉強についていけない生徒が増加することが大きく影響していると考えられる。また、時間が経つにつれ自分がおかれている現実を自分なりに認識していく過程と解釈できる。男子の方が高いのは、思春期における精神発達の差と理解できる。TABLE 3より「心の教室」を利用した生徒は、利用したことがない生徒に比べ得点が有意に高かった。

F 2 の代表項目として負荷量の最も高いものをあげると、「『何かにおさえつけられている』と感じる (.71)」、「何かに追いつめられているように感じる (.71)」であった。また、「何かにはばられ自由に動けない (.67)」、「何かにせかされて生きている感じがする (.67)」、反転項目として「私の毎日はのびのびしている (-.67)」があげられる。これは中学校生活における、ゆとりのない状況が窺われる。また、目に見えない外的圧力によるプレッシャーから息苦しさを感、それがストレスとなって確実に中学校生活をネガティブなものに変えていく。そこで第2因子を「焦燥・圧迫感」の因子と命名した。この因子に対応する第2尺度は、TABLE 2 より学年が進むにつれ高くなる。これは進路の決定や受験という彼らにとっての大きな試練が影響しているものと考えられる。そして、女子は男子よりも全体的に高かった。これは女子の方が男子に比べ、より現実的に自分を見つめ自分の将来のことを真剣に考えていることを表している。また、TABLE 3 より「心の教室」を利用した生徒は利用したことがない生徒に比べ高かった。これは、「心の教室」が「焦燥・圧迫感」を強く感じている生徒にとってのストレスの発散の場になっていることを示唆している。

F 3 の代表項目として負荷量の高いものを3つあげると、「私はこの社会に欠くことはできない貴重な人間だ (.73)」、「私は役に立つ人間だ (.73)」、「私は可能性に満ちた人間だと思う (.68)」があげられる。これらは、自己効力感や集団の中での存在感、物事に対しポジティブに捉えようとする姿勢を表している。そこで第3因子を「自信・存在価値」の因子と命名した。この因子に対応する第3尺度は、1学年は他学年より高く、男子は女子に比べ高かった。これは、S 2 の結果からも理解できるところである。1年生は2、3年生に比べいろいろな体験も少なく、挫折感や焦燥感を持つよりも自分の可能性を強く信じていると解釈できる。また、「心の教室」を利用した生徒は利用したことのない生徒に比べ低かった。

F 4 の代表項目として負荷量の高いものを3つあげると、「休み時間は一人で過ごすことが多い (.66)」、「休み時間や昼休みなど一人でボーとしていることが多い (.65)」、「新しい友達を作るのがにがてだ (.60)」であった。また、他には「みんなが冷たい目で私を見ているようだ (.49)」、「何か言っても無視されることが多いようだ (.41)」などがあげられる。これは教室で孤立している自分、みんなから疎外されている自分を客観的に捉えている因子と解釈される。そこで第4因子を「孤独・疎外感」の因子と命名した。FIGURE 1 より、この因子に対応する第4尺度は他の尺度と比べ低い値であるが、落合 (1989) によると「孤独感とは自我の発見に伴って必然的に感じるものである。また、理想を求めるといふ対人関係上での特徴が孤独感を感じさせる。」とまとめている。この尺度は男女とも3年生が最も高く、1、2年生には差がなかった。「心の教室」利用者と非利用者の間には、有意差はなかった。

F 5 の代表項目として負荷量の高いものを3つをあげると、「友達と本音で話さない方がよい (.72)」、「傷つきたくないで、友達に本当の姿は見せられない (.69)」、「友達と本音で話すのはさけている (.67)」であった。これは自己を開示することによって自分が傷ついてしまうのではないかという恐怖感があり、他者との信頼関係がそこに至るまで達していないことを表している。そこで第5因子を「不信・自己閉鎖」の因子と命名した。この因子に対応する第5尺度は、学年間の差はないが、男子の方が女子よりも高かった。これは長沼・落合 (1998) の「男子に比べて女子は心理的に接近した関係を持つようとする。」と同じ内容の結果となった。さらに、落合・佐藤 (1996) によると、「中学生の『本音を出さない自己防衛的なつき合い方』の因子得点が、高校生や大学生と比べて高い。この防衛的なつき合い方は、友人との間に心理的な距離をおこうとするつき合い方であり、

自分にまだ自信がもてず、ちょっとした批判や刺激にも反応してしまう頃に見られる。」ということが明らかになっている。

F 6 の代表項目として負荷量の高いもの 3 つをあげると、「自分はやさしい人々にかこまれ、決して一人ではない (.56)」、「私が話しかければ、みんな親切におうじてくれる (.53)」、「私のことをしんげんに考えてくれる人がいる (.52)」、また「みんないつもあたたかい心で私をむかえいれ

TABLE 2 中学生の対人関係における発達的变化と性差

尺度名		尺度得点平均値				主効果		交互作用
		1年生	2年生	3年生	全体	学年	性別	
S 1 無気力・あきらめ $\alpha = 0.71$	男子	3.30(.45)	3.30(.40)	3.39(.43)	3.33(.43)	3>1,2	男>女	
	女子	3.19(.37)	3.26(.45)	3.35(.38)	3.27(.41)			
	全体	3.24(.42)	3.28(.42)	3.37(.41)	3.29(.42)			
S 2 焦燥・圧迫感 $\alpha = 0.81$	男子	2.40(.61)	2.52(.64)	2.65(.62)	2.52(.64)	3>2>1	女>男	
	女子	2.44(.60)	2.67(.60)	2.84(.61)	2.65(.62)			
	全体	2.41(.61)	2.59(.62)	2.74(.63)	2.57(.63)			
S 3 自信・存在価値 $\alpha = 0.71$	男子	3.69(.50)	3.59(.49)	3.56(.50)	3.61(.50)	1>2,3	男>女	
	女子	3.61(.48)	3.48(.39)	3.41(.40)	3.50(.44)			
	全体	3.65(.49)	3.53(.45)	3.49(.46)	3.56(.47)			
S 4 孤独・疎外感 $\alpha = 0.74$	男子	2.50(.52)	2.55(.57)	2.62(.59)	2.56(.56)	3>1,2		
	女子	2.55(.60)	2.48(.53)	2.59(.60)	2.54(.58)			
	全体	2.52(.56)	2.52(.55)	2.61(.59)	2.55(.57)			
S 5 不信・自己閉鎖 $\alpha = 0.85$	男子	2.77(.74)	2.79(.76)	2.77(.76)	2.78(.75)		男>女	
	女子	2.45(.74)	2.64(.79)	2.53(.76)	2.53(.76)			
	全体	2.61(.76)	2.72(.77)	2.65(.77)	2.65(.77)			
S 6 親和・信頼 $\alpha = 0.69$	男子	4.10(.49)	3.91(.50)	3.91(.48)	3.97(.50)	1>2,3	女>男	
	女子	4.20(.47)	4.10(.46)	4.11(.48)	4.14(.47)			
	全体	4.13(.49)	4.00(.49)	4.01(.49)	4.05(.49)			
S 7 同調・他者志向 $\alpha = 0.83$	男子	3.53(.71)	3.20(.74)	3.10(.79)	3.28(.77)	(1>2>3)	(女>男)	男1>男2, 男3 女1, 女2>女3 女2>男2 女3>男3
	女子	3.61(.68)	3.52(.65)	3.36(.68)	3.50(.68)			
	全体	3.56(.70)	3.36(.72)	3.22(.75)	3.39(.73)			
S 8 自己確立・開示 $\alpha = 0.71$	男子	3.13(.66)	3.08(.65)	3.09(.66)	3.10(.66)	1>2	女>男	
	女子	3.31(.67)	3.17(.65)	3.22(.61)	3.23(.65)			
	全体	3.22(.67)	3.12(.65)	3.15(.64)	3.17(.65)			

注意 1 : 数値は尺度得点の平均値。() 内は標準偏差。

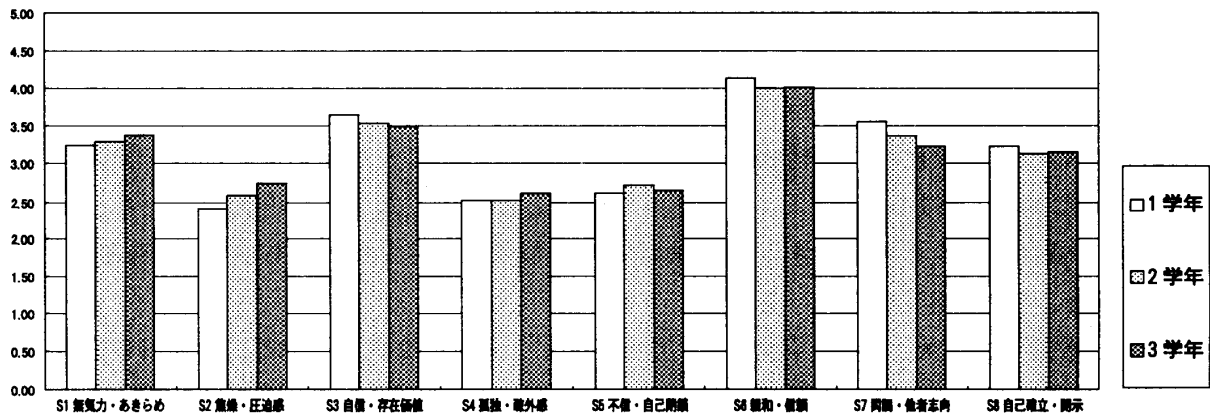


FIGURE 1 対人関係の尺度得点による発達的变化

てくれる (.52)」で負荷量が同じだった。そこで第6因子を「親和・信頼」の因子と命名した。この因子に対応する第6尺度は、FIGURE 1 から分かるように、8個の因子の中で最も高い尺度得点であった。1年生が2、3年生より高く、女子の方が男子よりも全体的に高い。また、「心の教室」を利用した生徒と利用したことがない生徒との差はなかった。孤独感・疎外感とは対照的に、「1人ではないんだ。自分は仲間に理解され、受け入れてもらっているんだ。」という意識は、中学生にとって、対人関係の理想とも考えられる。

F7で負荷量の高い代表項目をあげると、「どんな友達とでも仲良しでいたい (.74)」、「どんな人ともずっと友達でいたい (.71)」、「どんな友達とでも楽しくつきあいたい (.66)」であった。これは、分け隔てなく多くの者を受け入れると同時に自分も受け入れてほしいという願望が隠れている。まわりに合わせることによって、自分が孤立したり疎外されたりするのを避けようとする対人関係が表れていると解釈できる。よってこの第7因子を、「同調・他者志向」と命名した。この因子に対応する第7尺度は、交互作用が有意であったため、下位検定を行った。その結果、1年生男子は2、3年生男子より高く、1、2年生女子は3年生女子に比べて高かった。さらに、2、3年生女子はそれぞれ2、3年生男子に比べ高く、「心の教室」を利用した生徒は利用したことがない生徒に比べ高かった。

F8で負荷量の高い代表項目をあげると、「友達と本当の姿を見せ合うことで、少しくらい傷ついてもかまわない (.56)」、「友達と本音を言い合うことで、傷ついてもしかたない (.52)」、「友達と意見や考えがくいちがっていても自信をなくしたりしない (.51)」だった。これは表面だけの関係ではなく、お互い内面から理解し合い、ありのままの自分を出していこうとする対人関係を表しているため、第8因子を「自己確立・開示」の因子と命名した。そして、この因子に対応する第8尺度は2年生より1年生の方が、男子より女子の方が高かった。

全体としては、FIGURE 1 より、第6尺度の「親和・信頼」の尺度が最も高く、第3尺度の「自信・存在価値」、第7尺度の「同調・他者志向」と続く。そして、最も低いのは第4尺度の「孤独・疎外感」だった。また、発達的变化を見ると第1尺度の「無気力・あきらめ」と第2尺度の「焦燥・圧迫感」が学年が進むにつれ高くなり、第3尺度の「自信・存在価値」と第7尺度の「同調・他者志向」は逆に低くなる傾向にある。これは中学生における対人関係の特徴として、「中学生は、自分を客観的に見たときに自分が信頼できる仲間の中に存在していることを望み、他者とのつき合い方は、自己を開示し本音でつき合うことを理想としている。また、多くの友達に自分を

受け入れてもらいたいという気持ち強いが、それは学年が進むにつれ薄れていく。そして、だんだんと無気力感と焦燥感がアンビバレントな状態で高まっていき、中学校生活に息苦しさを感ずるようになる。」といえる。

次に、「心の教室」を利用した経験がある生徒と、利用したことがない生徒の対人関係における尺度得点の平均値の比較を行う。「心の教室」を利用した経験がある生徒と利用したことがない生徒の対人関係における尺度得点をt検定で比較した結果をまとめたものがTABLE 3である。それによると、S1、S2、S3、S7において有意差があった。S1「無気力・あきらめ」の尺度とS2の「焦燥・圧迫感」の尺度、S7の「同調・他者志向」の尺度のいずれも利用経験者の方が高かったが、S3の「自信・存在価値」の尺度については低かった。これらの結果から「心の教室」を利用したことがある生徒について次のような特徴があげられる。

「みんなと同じでいたい、みんなに受け入れられたいという気持ち強いが、集団の中において自分の存在価値を見いだせない。そのため学校生活の中に焦燥感や圧迫感を強く感じ、何事もネガティブに捉えてしまう傾向にある。」

では、彼らがいったいどのような意識を持って「心の教室」を利用しているのか、実際どのようにそこで過ごしているのかの調査結果が、TABLE 4である。この結果はもちろん利用経験者165名の回答によるものである。従って一人平均2つ以上答えていることが分かる。また、最も多かった目的が「相談員とおしゃべり」であった。これは、利用経験のある生徒の6割以上を示す。そしてこの結果は、彼らの対人関係の特徴からも理解できるものである。

次に「何かを相談するために」利用した生徒も意外と多かった。中学生の場合、困り事や悩み事の相談相手として、親や教師よりも友人を選ぶケースが多い。しかし、実際は中学生の友人関係において、自己を開示し本音でつきあ

TABLE 3 「心の教室」利用者と非利用者との比較

尺度	利用したことがある			利用したことがない			t 値
	平均値	度数	標準偏差	平均値	度数	標準偏差	
S 1	3.37	151	.42	3.09	1085	.42	2.22*
S 2	2.80	158	.59	2.55	1104	.63	4.68**
S 3	3.44	151	.41	3.57	1110	.48	-3.30**
S 4	2.53	154	.59	2.55	1103	.56	-0.39
S 5	2.64	160	.74	2.66	1111	.77	-0.42
S 6	4.05	155	.49	4.05	1101	.50	0.33
S 7	3.55	156	.62	3.37	1118	.74	2.86**
S 8	3.20	159	.59	3.16	1132	.66	0.63

平均値は尺度得点の平均である。* <0.05 ** <0.01

TABLE 4 「心の教室」利用目的

利用経験者165名

内 容 (複数回答)	度数	割合%
相談員とおしゃべり：a	109	66.06
友人関係についての相談：a	60	36.36
休むため：b	39	23.64
部活(先輩・顧問 他)についての相談：a	34	20.61
異性についての相談(恋愛 他)：a	25	15.15
先生についての相談：a	20	12.12
他にいくところがないから：b	19	11.52
受験についての相談：a	14	8.48
自分の将来についての相談：a	14	8.48
家庭についての相談：a	14	8.48
学習についての相談(勉強の方法・ノートのとり方)：a	11	6.67
自分の性格についての相談：a	9	5.45
遊ぶため：b	9	5.45
自分のからだ(体型・健康 他)についての相談：a	7	4.24
友人に誘われた	7	4.24
絵を描きに行った：b	3	1.82
暇つぶし：b	2	1.21
先生が好きだから：a	1	0.61
世間話をするため：a	1	0.61
教師の体罰について：a	1	0.61
何か事件が起きたとき：a	1	0.61
たまり場になっているから：b	1	0.61
ストレス解消：b	1	0.61
勉強を教えてもらった：a	1	0.61
地区の行事の打ち合わせ：a	1	0.61
合 計	404	244.85

TABLE 5 スクールカウンセラーや「心の教室」を必要とする理由

「必要である」964名

理 由	度 数	割合%
親や友人に話せないことが相談できる	120	12.45
みんなが困るから（必要としている人がいるから）	118	12.24
悩んでいる人がいる	87	9.02
一人で悩む（相談する人がいない）なら心の教室へ行って相談した方がよいと思うから	47	4.88
人に相談すると気が楽になるから（すっきりする、何かが変わる）	44	4.56
悩みを相談できる場所（人）だから（必要）	44	4.56
悩み事が言えなくて一人で悩み、苦しみ、自殺まで考えてしまう人がいるから	39	4.05
相談によってくれること（安らげる場）が大切だと思う	37	3.84
あった方がいい	34	3.53
悩み事が言える人がいると安心する（ホッとする、落ち着く）	34	3.53
悩み事があつたり困ったとき、必要ときにはいつでも行ける	32	3.32
いいこと（本音）が言える場所だから	28	2.90
いじめられて困っている人の助けになる	26	2.70
心のケアをしてくれる人（スクールカウンセラー、心の教室相談員）がいた方がいい	21	2.18
悩みを解決したい（解決できる）	15	1.56
悩み事やいやなことがあつたとき便利、役立つ、頼れる	14	1.45
真剣に悩みを聞いてもらいたいから、聞いてくれるから	13	1.35
先生がいい人で楽しい、優しい、おもしろい、好き	12	1.24
友人がいない人（相談する人がいない人、学校に馴染めない人）は、カウンセラーと話せばよい	9	0.93
何となく	8	0.83
情報交換の場所、休憩の場所、たまり場、遊び場	8	0.83
心が癒される場所が必要	7	0.73
子供（友人）ではなく、大人の意見が聞きたい。	5	0.52
自分に自信がない、考えがない、不安である（人にとって必要）	5	0.52
休み時間一人は辛い、教室にいたくない、居場所がない（そういう人がいる）	4	0.41
集団生活ができない者にとって必要（学校があれている、学校が静かになる）	4	0.41
相談しやすい	3	0.31
専門家がいたら心強い	3	0.31
（行きたくても）まわりの目が気になる、行きづらい	2	0.21
励ましてくれる、励みになる	2	0.21
時代が時代だから（家族のコミュニケーションが減るなど）	2	0.21
勇気づけられた、行ってよかったから	2	0.21
（障害で）馬鹿にされたりいやな思いをしたくない（している人がいる）	2	0.21
親や友人（教師）と相談すればいい（相談する）	1	0.10
いらぬから、必要でない、行きたくない、使わない	1	0.10
自分が変わると思わなければ意味がない	1	0.10
何を話していいかわからない	1	0.10
世間話ができる	1	0.10
大人が信用できない（相談しづらい）	1	0.10
相談しないと解決しないから	1	0.10
悩みをうち明けることは必要	1	0.10
自分を理解してほしい	1	0.10
合 計	840	87.14

うことまで発展していない生徒も多くいることが分かる。さらに、目的の内容から、大きく2つのグループに分けることができる。1つは、相談やおしゃべりなど対話を目的としたグループと、もう1つは暇つぶしや遊びなど自分の居場所・空間を求めたグループである。TABLE 4の目的の内容を対話はa、空間はbと分けた。グループaとグループbのそれぞれの合計は、323と74で、圧倒的に対話を求め来談するケースが多かった。しかし、グループbの生徒にとって、なぜ「心の教室」を自分の居場所とするのか、どうして自分の教室は居づらいのか考えていかなければならない。それについては2.「心の教室」を利用する生徒の参加観察で考察したい。

それでは次に、スクールカウンセラーや「心の教室」が生徒にとって具体的にどのような効果があるのか、考察したい。

平成12年夏の新聞報道によると、不登校生徒はついに13万人を越えた。文部科学省ではその対策として、スクールカウンセラーや「心の教室」の配置をあげた。そしてその成果として、スクールカウンセラーが派遣されている学校はそうでない学校と比較して不登校の増加率が低いことを示した。「心の教室」についてはふれていなかったが、なかなかその成果を具体的に示すのは難しいものである。そして、スクールカウンセラーについての先行研究や文献はたくさんあるが、「心の教

TABLE 6 スクールカウンセラーや「心の教室」を必要でないとする場合

「必要でない」352名

理 由	度 数	割合%
いらないから、必要でない、行きたくない、使わない	69	19.60
親や友人(教師)と相談すればいい(相談する)	40	11.36
相談しても意味がない、解決の期待ができない、役立たない	26	7.39
悩み事がない、話すことがない	25	7.10
行く人が少ない、利用が少ない、いない	24	6.82
情報交換の場所、休憩の場所、たまり場、遊び場	16	4.55
関係のない人(あかの他人、知らない人)に自分のことは話づらい(話したくない、話す気にはなれない)	15	4.26
心の悩みは自分の問題、自分で解決すべきである	14	3.98
利用したことがないからどういところか分からない	9	2.56
利用して心が直ったケースを聞いたことがない、悩みを相談しても解決はできない、誰もそこは行かない	8	2.27
(行きたくても)まわりの目が気になる、行きづらい	7	1.99
何となく	4	1.14
大人が信用できない(相談しづらい)	4	1.14
面倒くさい、うざい	4	1.14
悩みの解決法を教えてくれない	3	0.85
必要のないように心がける(あまえない)	3	0.85
本当に悩んでいる人はそんなところへ行く余裕はない	3	0.85
秘密を守れない	3	0.85
悩んでいる人がいる	2	0.57
自分が変わらなければならない意味がない	2	0.57
何を話していいか分からない	2	0.57
自分で解決する	2	0.57
行く暇がない	2	0.57
それらを必要としない人間関係を作っていけばよい	2	0.57
授業のサボり場になっている	2	0.57
堅苦しい	1	0.28
専門家ではないから	1	0.28
合 計	293	83.24

室」についての先行研究や文献はほとんどない。これは、派遣されている数の割合から考えれば圧倒的に「心の教室相談員」の方が多いが、その性格上相談員の方々は、様々な職業に就いていたり、様々な経験をしているので、生徒との対応も自分の経験やパーソナリティを生かしたものとなる。それに対してスクールカウンセラーは、すべて心理学を専攻した専門家である。そこに研究の難しさが考えられる。

スクールカウンセラーや「心の教室」に対し、生徒はどのような意見や考えを持っているのだろうか。スクールカウンセラーなどの先行研究を見ても、直接生徒の意見などを聞いているものは少ない。そこで、スクールカウンセラーや「心の教室」の必要性とその理由を直接生徒に聞いた。調査対象の学校はいずれも「心の教室」配置校だったので、スクールカウンセラーについては口頭で説明し質問に答えてもらった。TABLE 5、6 に自由記述してもらった結果をまとめた。それによると、「必要性について」は10人に7人以上の割合(73%)で認めており、ほとんどの中学生が第三者的な立場の相談員が必要であると感じているといえる。そしてこの結果には学年間の差はほとんどなかったが、男女間において、女子(81%)の方が男子(66%)よりもその割合が高かった。

必要である理由については、ほとんどが悩み事、相談事のアドバイザーとして期待し、利用している。必要でないとする生徒の理由については、その生徒自身が悩んだり、困った経験がない様子が窺える。中学生にとって、最も多感な時期に気軽に悩み事を打ち明けられる第三者的な立場の大人の存在は勇気と知恵と生きる力を与えてくれる心強い味方である。

では、実際に「心の教室」を利用したことがある生徒について考察したい。調査を行った生徒のうち「心の教室」を利用したことがあると答えたものは165名だった。そのうち134名が女子で、やはり圧倒的に女子の利用が多かった。利用する時間帯は多い順に「昼休み」、「放課後」、「授業中」、「業間休み」と続いた。また、利用した後の感想は、半数以上が「利用して良かった」という感想

だった。しかし、「暇つぶしができた」が40%以上いて、これをどのように理解してよいのか迷うところであるが、TABLE4の利用目的であげたbの空間・居場所を求める生徒の感想と考えられる。いずれにせよ、利用後の感想はほとんどがポジティブなものであり、中学生にとって、第三者的立場におかれている相談員と居場所としての空間が、とても大切なものであることが明らかになった。

2. 「心の教室」を利用する生徒の参加観察

厚木市のある中学校で、2ヶ月間「心の教室」における参加観察を行った。その中学校では、50歳代の元小学校教師の女性の相談員と20歳代の女子大生の二人体制で行っており、そこに9月・10月の2ヶ月間、筆者の一人(40歳代男性)が加わり三人体制で対応にあたった。複数体制といってもそれぞれ担当日を決め「心の教室」に待機するのは一人である。また、基本的に生徒が来談できる時間帯は、昼食時から放課後4時までとし、授業時間は特別な理由のない限り来談できないという学校での約束となっている。参加観察を行った筆者の一人については、その学校の2学期始業式において、学校長より全校生徒に紹介していただいた。

中学校の様子は、駅から4～5kmはなれた閑静な住宅地の中にあり、保護者も会社員が多い。また、共働きも多いためか、昼間は学校周辺に人影は少ない。東西を2本の川が流れ、南西には2本のバイパスが走っているので、他校の中学生が用もなく学校を訪れることは少ない。1年生男子は68名、女子60名、2年生男子は45名、女子56名、3年生男子は63名、女子58名、の合計350名の中規模学校である。生徒の様子は、温厚で純朴な生徒が多く、授業も熱心に取り組み学校行事へも積極的に参加している。しかし最近、髪の毛を染めたり、授業を抜け出そうとする生徒が少数ではあるが出てきている。生徒の多くは、駅周辺の塾へ通い、他校との交流もそこで行われる。中学校区に2校の小学校があるが、そのうち1校は半数の生徒が隣の中学校に進学する。1年生の1学期までは小学校ごとにグループを作るが、2学期以降はうち分け、出身小学校間によるトラブルは、例年特に見られなかった。しかし、時間の経過とともに、いじめや人間関係によるトラブルは毎年見られ、中には小学校から未解決のまま継続しているものもある。不登校の生徒はいないが、その傾向にある生徒が2年生に数名存在する。彼女たちはクラスで孤立傾向にあり、そのうち1人は「心の教室」に毎日のようにやってきた。4月から10月までの間に「心の教室」に来談した生徒の延べ人数は、582名(実数82名)だった。その内訳は、1年生男子が9名で、1年生女子が130名、2年生男子が120名、2年生女子が319名、3年生男子が0名、3年生女子が4名であった。この結果から圧倒的に2年生女子の利用が目立つ。個人別の利用回数については、1回だけ利用したものが24名と最も多く、2回が11名、3回が11名と続く。最も利用回数が多いのは、2年生女子

TABLE 7 来談内容

内 容	4月	5月	6月	7月	9月	10月	合 計	種 類
いじめ	0	0	0	0	2	0	2	*
いじめの訴え	0	1	0	0	0	1	2	a
お願い	0	0	0	0	2	0	2	b
つきあい	2	6	2	0	1	1	12	*
サボリ	0	0	0	0	0	2	2	c
プレゼント	0	0	2	0	0	0	2	b
暇つぶし	21	13	11	0	0	0	45	d
顔見せ	7	2	0	1	0	1	11	b
休憩休息	0	0	0	0	1	1	2	d
居場所	19	21	23	7	22	14	106	c
喧嘩	0	0	3	0	2	0	5	*
自己開示	1	0	8	0	2	1	12	b
捜索	0	0	0	0	2	0	2	*
相談	4	5	2	0	10	9	30	a
待合室	0	0	1	0	0	2	3	d
断念	0	0	0	0	11	0	11	*
談話	19	12	15	14	51	43	154	b
非難される	0	0	0	0	3	0	3	*
不服を唱える	0	0	0	0	2	0	2	a
不満を訴える	3	1	6	0	8	0	18	a
勉強	0	0	1	0	3	0	4	d
報告	0	3	0	0	1	2	6	b
傍観	0	0	0	0	1	0	1	*
轟拳	0	0	0	0	0	5	5	*
遊び場	25	9	43	11	34	18	140	d
合 計	101	73	117	33	158	100	582	*

種類：a ネガティブな対話、b ポジティブな対話
c ネガティブな利用、d ポジティブな利用

の115回である。この生徒はほとんど毎日来談し「心の教室」で過ごす。

はじめに、全体としての傾向を分析したい。来談したときの表情や行動、対話の内容などをまとめ、さらに当人にとっての来談の「意味づけ」をした。それらを月別にまとめたものがTABLE 7である。意味づけで最も多いのは「談話」で、次が「遊び場」、「居場所」と続く。これは先に述べた生徒の調査によるものと一致した。すなわち、「対話」を目的とするものと自分の「居場所」、「空間」を求めるものに大別される。それらをさらに2つに分け、「ポジティブな対話」と「ネガティブな対話」、教室（空間）の利用も「ポジティブな利用」と「ネガティブな利用」に分けた。その結果がTABLE 7の種類欄である。

aを「ネガティブな対話」、bを「ポジティブな対話」、cを「ネガティブな利用」、dを「ポジティブな利用」とした。それらをグラフで表したものがFIGURE 2である。

「ネガティブな対話」は、意味づけ項目の中の「いじめの訴え」、「相談」、「不服を唱える」、「不満を訴える」とした。「ポジティブな対話」は、意味づけ項目の中の「お願い」、「プレゼント」、「顔見せ」、「自己開示」、「談話」、「報告」とした。また、「ネガティブな利用」については、「サボり」、「居場所」とし、「ポジティブな利用」を「暇つぶし」、「休憩休息」、「待合室」、「勉強」、「遊び場」とした。

このグラフから分かるように、a、b、c、dいずれも月ごとに大きく変化し、増減の仕方も同じである。全体的に見て、7月が最も低いのは「心の教室」の開設された日数が少ないことと、学期末試験や部活の総合体育大会などでほとんどの生徒は放課後忙しかったことがあげられる。同様に5月はゴールデンウィークと家庭訪問などがあり、10月は文化発表会に向けた準備とクラスでの合唱発表会の練習などがあった。つまり、学校行事などがある月は全体として少ない。グループ別に見ると、まずaのネガティブな対話について、9月が最大だった理由は、教師の指導に対する不満を訴えた女子がいたことにある。この時期になると新しい学年での生活にも慣れ学校の様子が冷静に見えて来ている様子が窺える。ポジティブな対話も9月が最大であった。相談員とおしゃべりに来る生徒が、9月、10月と1学期の倍以上に増え、相談員との人間関係ができ、気軽に「心の教室」を利用する生徒の様子が窺える。ネガティブな利用は、4月、5月、6月、9月ほぼ同数で多かった。これは特定の生徒が毎日のように利用している結果で、開設される日数に比例する。最後のポジティブな利用であるが、圧倒的に6月が多かった。これは昼休みなど集団で、折り紙やお絵描き、漫画本などを読んで過ごす生徒が多かったためである。これは梅雨の時期の影響も考えられる。

FIGURE 3は、各月別のポジティブな来談とネガティブな来談の割合を示したものである。ネガティブな来談に

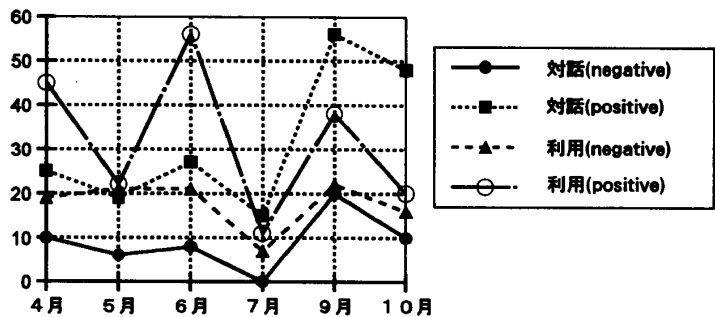


FIGURE 2 内容別来談回数

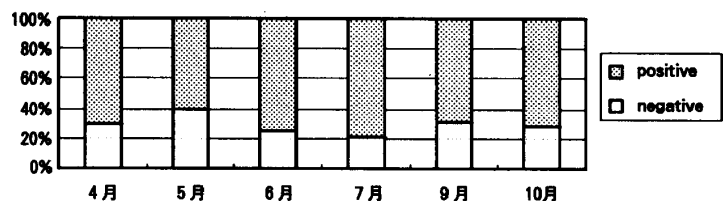


FIGURE 3 利用内容

注目すると、5月と9月が多い。しかし、5月については、ネガティブな項目が多いというより、ポジティブな項目の中の遊び場としての利用が極端に少なかったためと考えられる。9月については全体的に相談や不満、不服の増加が影響している。

次に相談員による内容について調べてみる。来談件数は、相談員1（50歳代女性）が272件、相談員2（20歳代女性）が264件、相談員3（9～10月、40歳代男性）が46件だった。

その内容はFIGURE 4 のようになった。相談員1と相談員2については、来談した生徒数にあまり差はないが、来談の内容について若干の差が見られる。まず、相談員2は相談員1に比べ、ポジティブな利用がかなり多い。逆に相談員1は相談員2に比べネガティブな対話が多いことが分かる。ポジティブな利用については相談員2は1の時より遊びに来る生徒の数が多い。これは相談員が中学生に近い年齢なので気軽に行きやすいという感覚が回数を増やす。ネガティブな対話については、相談員1の時に学校や教師への不平不満を訴える生徒が多かった。相談員3については期間も短く利用回数も少なかったが内容としては相談員1に近い。相談員によって生徒の利用目的が変わっていくことがこの結果から明らかになった。

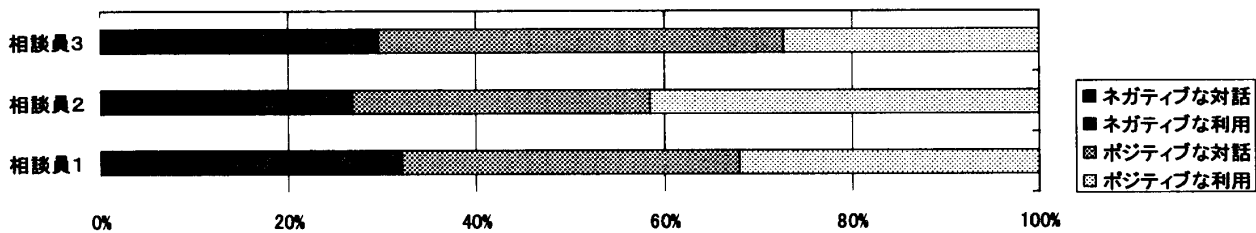


FIGURE 4 相談員別内容

3. 厚木市内公立中学校に配置されている「心の教室相談員」に対するアンケート調査

市内には全部で13校（A～M中学校とする）の公立中学校がある。全部の中学校に「心の教室」が配置されている。そのうち6校は2人体制で相談活動を行っているので、相談員は全部で19名である。「心の教室」の利用状況やそれぞれの工夫している点、困っていること、学校との連携について知るため全員を対象としたアンケート調査を実施した。その結果と考察を述べる。

まず19名の相談員の内訳は、女性が18名で男性が1名だった。年齢については、20歳代1人、40歳代4人、50歳代12人、60歳代2人で、50歳代が最も多かった。現在の職業については、主婦が最も多く、14人だった。他は自営業が1人、大学生が1人、会社員が1人、不明が2人だった。職歴については、小中学校の元教員と会社員がそれぞれ6人で最も多く、元幼稚園（含：保母）の先生が3人、地域の主任児童員1人、補導員が1人、テニスのインストラクターが1人だった。また、臨床の経験（ボランティアも含む）や心理に関わる資格や経験、大学で学んだ心理学に関わる内容については、準カウンセラー資格を取得している方が1人、大学で児童心理学や青年心理学を学んだ経験者が7人、青少年相談員や電話相談員などのボランティア経験者が4人、講演や研修を受けた経験がある方が2名だった。

TABLE 8 は、13中学校の、平成12年4月から10月までの「心の教室」の利用内容である。数字は来談した生徒数ではなく利用された件数で、つまり複数で来談しても目的が同じだったら1件とした。細かく記録を取っていない学校もあり、この表から全体を分析するのは正確さを欠くが、分かる範囲で考察したい。13校の中からすべての項目の件数が分かっている学校を選び各項目の割

TABLE 8 「心の教室」利用目的 (1)

内容	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
1. 友人関係についての相談 (含: いじめ)		25	7	18	11	22	0	2	多数	5	2	16	2
2. 異性についての相談 (恋愛ほか)		7	0	1	0	23	1	4	多数	0	0	2	0
3. 学習についての相談		2	0	0	0	7	0	0	多数	6	4	2	2
4. 受験についての相談		0	0	0	0	2	1	2	多数	0	0	8	3
5. 自分の将来についての相談		2	1	1	0	1	0	0	多数	1	0	0	1
6. 家庭についての相談		10	0	1	3	5	0	2	多数	2	0	2	1
7. 先生についての相談		4	1	0	4	1	0	1	多数	2	0	0	0
8. 自分の体についての相談		0	0	0	0	1	0	0	多数	2	0	5	0
9. 自分の性格についての相談		0	2	1	0	2	4	0	多数	1	2	2	0
10. 部活についての相談		4	2	2	5	21	0	2	多数	2	4	5	3
11. クラスについての相談		4	2	0	0	0	0	0	多数	0	0	0	0
12. 性についての相談		1	0	0	0	0	0	0	多数	0	0	0	0
13. 相談員とおしゃべり	89	89	24	多数	148	55	12	23	多数	多数	多数	47	4
14. 教室に居づらいから		54	18	24	123	7	0	3	多数	多数	多数	3	0
15. お絵描きなどで遊ぶため		60	61	多数	68	21	42	440	多数	多数	多数	47	0
16. 心の教室の見学		8	0	0	0	0	0	0	多数	6	0	0	0
17. 宿題や勉強をするため		3	0	0	0	0	0	0	多数	2	0	0	0
18. 詩・俳句・絵本の創作		10	0	0	0	0	0	0	多数	0	0	0	0
19. 読書をする		8	0	0	0	0	17	0	多数	0	0	0	0
20. 授業に出たくない	537	2	0	0	0	0	0	0	多数	0	0	0	0
21. 編み物を教えてもらう		0	10	0	0	0	0	0	多数	0	0	0	0
22. 生徒同士のおしゃべり、話し合い		0	0	0	0	0	5	0	多数	3	0	5	0
23. 休息		0	0	0	0	0	0	0	多数	30	24	0	0
24. 友達をつくるため		0	0	0	0	0	0	0	多数	0	1	0	0
25. 教室へは行けないが登校するため		0	0	0	0	0	0	0	多数	0	0	0	0
26. 事件に巻き込まれて		0	0	0	0	0	0	0	多数	1	0	0	0
27. 先生からの相談	0	0	0	0	0	0	0	0	多数	0	0	2	0

合を求めたものが、TABLE 9 である。利用目的の半数近くが「お絵描きなどで遊ぶため」であり、生徒の憩いの場として活用されている様子が窺われる。「相談員とおしゃべり」も24.01%と多く、心のふれあいを求めてやって来る生徒もどこの学校でも多いことが分かる。また、相談員のパーソナリティーが子供たちに受け入れられていることも、明らかである。そして、「教室に居づらいから」が12.43%であり、「心の教室」の利用件数の1割以上を占める。これは、いじめや仲間はずれ、あるいは対人関係がうまくいかず孤立したり疎外感が高い生徒が多く存在していることを示す。この3つの内容で全体の8割を占める。教師は、多くの生徒が「心の教室」で救われていることを認識しなければならない。

このような生徒を受け入れるために、相談員自身が心がけていることや工夫していることについて自由記述してもらった。その結果、どの学校も生徒が憩いの場として過ごすことができるよう環境に気を遣っている。また、話すことがなくても退屈しないようにゲームや折り紙、お絵描きセットなどを用意している学校が多かった。相談員の意識も、生徒に自分は学校の先生ではないことを伝えるよう心がけている。また、カウンセラーという意識も持たず生徒の友人の中の一人として、生徒に受け入れられるよう努力している。

次に学校との連携について意見を求めた。学校との連携をどの程度とっているかの質問に対し最も多かった回答

TABLE 9 「心の教室」利用目的 (2)

内容	割合 (%)
1. 友人関係についての相談 (含: いじめ)	5.08
2. 異性についての相談 (恋愛ほか)	2.21
3. 学習についての相談 (勉強方法、ノートの取り方)	0.78
4. 受験についての相談	0.96
5. 自分の将来についての相談	0.30
6. 家庭についての相談	1.37
7. 先生についての相談	0.66
8. 自分の体 (体型、健康ほか) についての相談	0.36
9. 自分の性格についての相談	0.60
10. 部活 (先輩、顧問ほか) についての相談	2.51
11. クラスについての相談	0.36
12. 性についての相談	0.06
13. 相談員とおしゃべり	24.01
14. 教室に居づらいから	12.43
15. お絵描きなどで遊ぶため	44.15
16. 心の教室の見学	0.48
17. 宿題や勉強をするため	0.18
18. 詩・俳句・絵本の創作	0.60
19. 読書をする	1.49
20. 授業に出たくない	0.12
21. 編み物を教えてもらう	0.60
22. 生徒同士のおしゃべり、話し合い	0.60
23. 休息	0.00
24. 友達をつくるため	0.00
25. 教室へは行けないが登校するため	0.00
26. 事件に巻き込まれて	0.00
27. 先生からの相談	0.12
合 計	100.00

は、「不定期であるが必ず時間をつくる」で11人の相談員が答えた。次に多かったのは「必要があったとき」で4人、次が「頻繁にとっている」で2人、「定期的にとっている」は1人だった。その際に伝える情報については、「必要と思われたことのみを伝える」が13人で一番多く、「詳細にすべてを伝える」が2人、「生徒と約束したもの以外を伝える」と「学校側が求めた情報のみを伝える」が1人だった。相談員が学校から求められる情報と生徒との守秘義務の狭間で困惑する様子はなかったものの、学校によって生徒指導体制の違いから「心の教室」の位置づけや相談員の扱いも変わってくる。「心の教室相談員」についてはスクールカウンセラーとは違い、学校側がしっかりとイニシアティブをとり、相談員と意見を交換しながら共通理解を図っていく必要がある。

最後に、「心の教室」を生徒が利用することにおける問題点や困っている点について記述してもらった。その結果、「心の教室」の問題点をまとめると次の通りである。

- ①利用する時間帯の問題
- ②物理的環境の問題
- ③守秘義務
- ④どこまで学校とリンクするか
- ⑤学校との連携のあり方

まず①についてだが、これは参加観察をしているとき筆者の一人も迷ったときがあった。つまり、一般的にはほとんどの学校で授業時間の利用は認めていないが、相談の中身によっては絶対に人に聞かれては困るものや、不登校の生徒や保健室登校の生徒の利用も考えられる。学校側としては、授業をサボろうとする生徒などのたまり場になることを懸念している。授業中の利用が可能になるとその線引きが難しくなる。その最終的な判断は相談員が行い学校はそれを認めるべきである。その際、学校側とよく連絡を取り、例外的措置として、他の生徒には説明しなければならない。

次に②であるが、これは与えられた環境で工夫する以外ない問題である。ただし代案がある場合は、積極的に学校側と話し合いを持ち意見を交換すべきである。

③についての判断は、やはり相談員が判断すべきことではあるが、何でも守秘義務に従う必要はない。特に生徒の命に関わるような深刻な問題や、助言を求められても答えることのできない場合は、生徒の許可をもらい、あるいは教師にあらかじめ状況を説明し、連携をとるべきである。

④のうち特に学校の規則との関連については、学校の中にいる以上学校の決まりに従い秩序を保つ、保たせることは当然であるが、だからといって細かく教師のように注意をしたり指導をする必要はない。多少は目をつむって見ない振りも必要なときもある。しかし、だからといって第三者的立場を履き違え、すべてを許し無法地帯になるようなことは避けなければならない。

⑤については、担当教員とよく連絡をとり、意見は積極的に述べる必要がある。一人でも多くの子供たちが明るく楽しい学校生活を送れるよう共通の目的意識を持って取り組みたい。

総合考察

平成12年12月に総務庁が発表した小中学生の対人関係における調査によると、「人は信用できない」との問いに対して「そう思う」が5.4%、「どちらかというと思う」が17.9%で、合わせて23.4%が同意した。また、5人に1人は「人と居ると疲れる」と訴えた。こうした子供たちの対人関係における問題は、深刻なものとなっている。本研究においても対人関係の「不信・自己閉鎖」

の尺度の「心をうちあけて話ができる人は、私にはいない」と「私にはほんとうに理解しあえる人はいない」の項目において、同意した生徒は全体の10.2%と12.0%であった。そして学校生活において、「孤独・疎外感」の尺度の「休み時間や昼休みなど一人でボーとしていることが多い」に同意した生徒が10.0%と割合がほぼ一致した。この背景には、テレビゲームや携帯電話、インターネットなどという親の世代にはなかった物が子供の対人関係に影響を与えていることがあると考えられる。そして学校では、対人関係がうまくつけれない生徒が増えている。このような生徒がいじめを受けたり不登校になったりするケースは十分考えられる。2の「心の教室」の参加観察の結果や3の「心の教室相談員」のアンケート結果から、そういった生徒が「心の教室」を利用していることが明らかになった。「心の教室」は孤立した生徒にとってのまさに「駆け込み寺」である。

平成12年8月に文部科学省が発表した平成11年度の小中学生の不登校生徒数は、小学校が26,044人、中学校が104,164人で過去最高を記録した。増加率は前年度と比較して2%と過去の調査で最も低い値であるが、少子化を考慮に入れると楽観は許されない。増加率が下がったことについては同省では、「今回だけでは判断できない」としながらも「学校に配置しているスクールカウンセラーなどが、子供が不登校になるのを未然に防いでいるのではないか」と評価し、平成13年度から5ヵ年計画でスクールカウンセラーを全国の3学級以上の公立中学校に、「心の教室相談員」も全国の公立学校に配置する事業を始めた。今回の研究により、生徒も10人中7人はその必要性を感じており、また1割以上の生徒が「心の教室」を実際に利用していることが明らかになった。また、利用の目的として、教室に居場所がなかったり、居たくない生徒や深刻な悩みを抱えた生徒の存在があり、文部科学省の推測の裏付けとなると解釈できる。つまり、現在の中学校において教師でも親でもない第三者的な立場の相談員は、必要不可欠なものであることが明らかになった。しかし、現段階では「心の教室」やスクールカウンセラーは、生徒にとっていつでも利用できる状況ではないので、早く多くの学校に配置されることが望まれる。

引用文献

- 井上 健治 1966 「青年と人間関係—友人関係—」 沢田慶輔（編） 青年心理学
東大出版会 Pp.195-208
- 鶴養 啓子 2000 「月刊生徒指導『スクールカウンセラー・心の教室相談員との連携』」
学事出版 Pp.116-121
- 落合 賢一 1998 「中学校における『心の教室相談員』のあり方について」
1997年度横浜国立大学教育相談研修・研究報告書
- 落合 良行 1989 「青年期における孤独感の構造」 風間書房 Pp.2-3
- 落合良行・佐藤有耕 1996 「青年期における友達とのつきあい方の発達的变化」
教育心理学研究 44,55-65
- 古沢 頼雄 1968 「青年期における自我同一性の形成と親子関係」 依田新（編）
現代青年の人格形成 金子書房 Pp.67-85
- 長沼恭子・落合良行 1998 「同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係」
青年心理学研究 10,35-47

- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合知恵子・佐藤眞一・長田由紀子 1995
「特性的自己効力感尺度の検討」 教育心理学研究 43,306-314
- 松井 豊 1990 「友人関係の機能」 齋藤耕二・菊池章夫（編著）社会化の心理学ハンドブック 川島書店 Pp.283-296
- 宮下一博・小林利宣 1981 「青年期における疎外感の発達と適応との関係」
教育心理学研究 29,297-304